

# その名大口

誇りと愛着のある学校

H 2 9 年 2 月 2 2 日

「伊佐考（イサコー）」 前田 裕一教頭

周囲を山々に囲まれた伊佐での生活は、盆地特有の気候で、夏の暑さと連日氷点下を記録する冬の寒さなど厳しい環境を体験し、今ではもうすっかりこの気候を楽しんでいます。また、春の忠元公園の桜や秋の曾木の滝公園の紅葉などは大変見応えがあり、歴史的にも、伊佐米や焼酎など食文化においても、多くの宝物をもった土地です。

伊佐市観光特産協会や日本大学生産工学部の永村研究室の学生を交えて、「もみじ祭り」総括会（2/11）を実施しました。今年度の取組を総括し、来年度に向けて「虎の巻」を創りました。自分たちの企画で地域を盛り上げようと取り組むことで、郷土への愛着や高校生のマネジメント能力が強化されたことと思います。3 / 1 4 の総学の時間に、生徒に発表します。



さて、皆さんは、九十有余年の歴史があり、北薩の雄たる

大口高校で学んでいます。しかし、普通科進学校だからといって、机に向かって本で学ぶだけでよいという学校ではありません。部活動をはじめ多くのボランティア活動など多方面での活躍を推奨しており、実際に多くの皆さんが参加・活動し、文武両道を目指しています。これらは、自分磨きの活動であり、社会に出るためのシミュレーションです。皆さんは、



実際の地域活動に携わっています。例えば、日本大学の学生と連携した「もみじ祭り」のプロデュースなどの地域イベント、学習ボランティアなどで子どもたちとの交流、そして、それらを見守る地域の大人との交流が行われています。これらの活動を通じ「郷土を知り、郷土に学び、郷土に生きる」を体感し、伊佐の宝物を自分自身の目で発見して欲しいのです。皆さんの行動は、必ず地域活性化活動に繋がっています。これらは、この地に活力を与え、いずれ宝に成長していきます。

しかしながら、大口高校生は、活動体験を、自分から発信する面では経験が不足しているように思います。これは、安易に「SNS等を利用した投稿を下さい」と言っているわけではありません。高校で学習したことも含め、様々な活動を通じて、地域の大人、小・中学生などの異年齢集団と交流したことなど自分が得た経験を言葉にして発すること、文字にして表現すること、イラストなど図表で視覚的に示すことなど、双方向のコミュニケーション能力を会得することが重要です。多くの体験が活かされないのはもったいないことです。「伊佐を知り、伊佐に学び、伊佐に生きる」ことを実感し、情報発信できるようになり、最後は自分の夢を叶えられるような人に成長して欲しいのです。

最後にアメリカの哲学者・心理学者のウィリアム・ジェームズの言葉を贈ります。 「『必ず実現する』という固い信念だけが、本来実現するかどうか

からない結果を実現させるのである」

「耐雪梅花麗」（雪に耐えて梅花麗し）。校内の梅が春を知らせてくれます。（2/10の大寒波到来日に撮影）



## 「心の器」 1学年 後野里美先生

皆さんは親友がいますか？ 心から信頼できる友人は何人いますか？ 私は有り難いことに親友を見つけたことができました。その人とは4歳の時からの付き合いで、三十数年経った今でも連絡を取り合っている仲です。中学校、高校と同じ部活動に入り、色々なことを相談した記憶があります。信頼して何でも話せる人、そんな人が一人いるだけで随分心が軽くなります。ささいなことでも話せる人、一番つらい時に一緒にいてくれる人。そんな人を学生時代に是非見つけてほしいと思います。人間だから毎日嬉しいことや楽しいことばかりではありませんね。嫌なことや腹が立つこともあります。島田妙子さんという児童虐待予防の本を出したり、命・愛・子育て・障がい・介護の幅広い内容で講演をしている方の、「怒りのつきあい方」というものを紹介します。ここにひとつのコップがあるとします。その中にビー玉を入れてあなたの今の心の状態を表現してみてください。今どれくらいのビー玉がコップに入っていますか？ 毎日が精一杯の人はコップにビー玉が満杯の人、頑張りすぎて体も心も悲鳴をあげている人はコップからビー玉があふれそうな人、毎日楽しく元気に過ごしている人はコップに余裕がある人です。皆さんはどうですか？ 「ビー玉の隙間」これが大事です。この隙間がなくなると自分に余裕がなくなり、すぐに怒ったり、人にあたってたりして、感謝をする余裕がなくなります。そこで3つのポイント。まず腹が立ったり、イライラしたりした時には「6秒待つ」次に「深呼吸をする」そして「1～2日で心のビー玉をぬいてあげる」ことが大切だそうです。そうすることで心は軽くなるそうです。自分の心の器も今より少し広げてみて下さい。もうすぐ皆さんは2年生。このあたりで1度立ち止まり、自分を振り返ってみてほしいと思います。



3年生への「高校生のための消費者教育教室」2/15

## 「自分ファースト」 2学年 鶴田昌子先生

精神分析を研究したフロイトによると、私たち人間は自分の考えや感情の大部分を分かっておらず、コントロールすることができない、ということである。私自身、自分の感情が理解できずに困った経験があり、50歳近い今になっても自分のことが分かっていないと実感することがある。まだ16～17歳の高校生が自分のことがよく分からないのは当たり前なことだと思う。ただしこの一年は、自分の進路を決めていく大「進学指導重点支援校」3年目。外部アドバイザーであるベネッセの中島先生を招いて、「アクティブ・ラーニング」の進路研修(2/17)を



実施しました。初めに、各教科のAL実践例を報告し、互いの取組を共通認識し、その後「これからの時代に対応する大口高校の授業づくりに向けて」という演題でアドバイスを頂きました。

事な年なので、自分に真剣に向き合って、どう進んでいくのかを考えてほしい。流行の言葉でいうと、「自分ファースト」を実践してほしい。自分の興味や関心、得意不得意、譲れない思いに真摯に向き合い、進む道を決めたら脇目も振らずがむしゃらに向かって行ってほしい。

学校関係者評価委員会(2/16)と始良伊佐教職員バドミントン大会(2/19)の大口高校メンバー。



